

誕生死

私は希望に満ちて、あなたを宿していた／その、長い9ヶ月の間／私は思い出す／あなたを宿したあの親密な時を／時々蹴ったり、動いたりしているのを感じた／あなたが私の中でゆっくりと成長するにつれ／あなたはどんな子かしらと／あなたの濡れた顔が、のぞいたとき／女の子？ 男の子？／なんという、喜びの瞬間よ／私はあなたの産声を聞くはずだった／そして、あなたにこんにちはと言うはずだった／あなたのために、みんな備えて／あとはあなたを迎えるばかり…／〈略〉／私はあなたを永遠に忘れないでしょう／〈略〉／生も死も、同じように意味があるのです (Leonard Clark 「STILLBORN」)

この詩は、『誕生死』(流産・死産・新生児死で子をなくした親の会編、三省堂、2002年)の冒頭に掲げられました。本書の編者は、母体のおなかの中で亡くなったケースをいう「STILLBORN」という英語には「それでもなお生まれてきた」という意味が含まれ、単に「死産」と訳される日本語以上の意味があると感じています。そして「おなかの中で亡くなってしまった場合には、戸籍にも載らず、存在がなかったことになってしまいます。でも私たちの子どもは、どんなに短い命であろうと、確かにこの世に生まれたのです。たとえ子宮という小さな世界から、生きて外にでてくることがなかったとしても、あるいは生まれてすぐに亡くなってしまったとしても、私たちにとっては、確かにわが子は“誕生した”のです」(同書あとがき、210頁)と語ります。

妊娠の喜びが「STILLBORN」の悲しみになったとき、否応なく「死」に直面し、その死に苦悩します。当事者でもあるこの本の編著者たちは「本」の中でそれを語り、お互いに語り合うことによって、いのちに向き合っていくことになりました。「生も死も、同じように意味があるのです」は母親たちに体験されていきます。亡くなった子どもが教えてくれた、与えてくれた「何か」に気づくという気づきが時間の経過とともに訪れると述べています。

「若い世代の人には、無事に生まれてくることのありがたさや、命の大切さに思いをはせてほしいのです。生まれてくるということは、こんなに大変なことなのです」(同書)。

死生学の学びは、まさにこの「生」の意味を支える「死」についての学びだといっていいでしょう。生物である私たちは必然的に死ななければなりません。死は、そのような存在のあり方を見据え、そして生きることを意味を再考させていきます。死あるいは死ぬことを意識しないではあり得ない人間という存在は、誕生そのものでさえ、死から逃れられないということになります。わずか数日であれ、数週であれ、あるいは出生の日が死と重なったときにこそ、授かった「いのち」の死とともに、そのいのちそのものの「存在」を強く意識するのは、生きて遣された者であるのです。

死生観の形成

たとえば、ハロルド・クシュナーによれば、人間は永遠に生きることも、死を受け入れたことによって、今ある人間と

して生きているということになります。クシュナー(ユダヤ教のラビ)は、人間は“エデンの園”に生えていた永遠の命を与える“命の木”ではなく、“善悪の知識の木”を選んで良心を授かった。そして、神は生命を生み出すという神聖な力を贈り物とした。その結果、人間は、永遠に生きるのではなく、子どもを産み、育て、教育し、たましい、価値観、名前を引き継いでいくことによって、死からうまく逃れている (Harold S. Kushner, *The Lord Is My Shepherd: Healing Wisdom of the Twenty-third Psalm*, Anchor, Reprint edition, 2004, pp.23～24) と説いています。

ここに述べられているのは、聖書の創世記のことです。永遠に生きることが可能であったかもしれない人間ですが、この木の実を食べたら死ぬということを神から告げられながらも、その実を食べたその選択こそが、人間という存在の有り様を決定したということにもなります。言い換えてみるなら、人は、今在る自分が永遠に生きていくのではなく、別の命を授かって生きていくという「生」を生きることにしたということでしょう。個々の死は、「命」を繋いで生きていくことの中で、受容されていきます。

「生まれ変わり」という考え方が有力な文化もあります。この連載でも主としてドライ・ラマを引用しながら紹介しました。

これら死生観と呼ばれるものが人間にとって必要なのは、生は死と不可分であるため、なぜ生きているのか、なぜ生きるのか、なぜ生きなければならないのかと巡る思いは、生きる意味を求め人間存在の根本的な欲求ではないかと思うのです。

辞書で「死生観」は「死あるいは生死に対する考え方。また、それに基づいた人生観」のように記されます。三省堂の『新明解国語辞典』では、「生ある限り充実した人生を送りたい」という抱負、「人生の終末における死についてのその人の考え方」という意味が載っています。死や死生観については、どの宗教も教えてきたところのものです。信仰・信心する者として、信じている信仰が示す死生観を受け入れて、それを自分のものとしている人だけでなく、どの人も死に向かう生き方や死の受け入れ方について考えておくこと、自分の死生観を持つことには、意味があるでしょう。死生観を持つことで、死に対する心構えや心の整理がつきやすいたしたら、死生観を持つという意味は重要です。また、死のタブー視、死を語らないという現実が変わっていくとも考えられます。ですから、死を教えるということに意味が出てきます。

死生学を基礎づけるためには、そもそも生命とは何かという問題、また、人間の生と死をどのように意味づけ理解するかという根本的な人間理解の問題を避けて通ることはできない。現代の実践的な諸問題と関連づけながら、古今東西の哲学や宗教思想を検討し、新たな思考法を探究していかなくてはならない。生命観や進化に関する新たな科学的知見の哲学的、思想的な意味を問い直すことも重要である。環境倫理をめぐる問題、人間の生命と動物や植物の生命の関係をめぐる問題、戦争や刑罰をめぐる実践哲学的問題なども守備範囲である。(刊行にあたって『死生学』(全5巻、東京大学出版会、2008、<https://www.utp.or.jp/series/shiseigaku.html>)